

里山文化 I

里山の成り立ちと保全

日時：平成25年10月6日（日） 10:00～15:00

講師：戸丸 信弘（名古屋大学大学院生命農学研究科教授）

概況



「里山の成り立ちと保全」

名古屋大学大学院生命農学研究科 教授 戸丸 信弘

里山(SATOYAMA)について考える前に、そもそも里山はどのような定義付けがされているのかを知らなければいけません。1759年に書かれた『木曾山雑話』には「村里家近き山をさして里山と申し候」とあり、また別に1960年代前半の四手井綱英によると、「この語はただ山里を逆にしただけで、村里に近い山という意味として、誰にでもわかるだろう。そんな考えから、林学でよく用いる『雑木林』『農用林』を『里山』と呼ぼうと提案した。」とある。里山の「山」は「森林」と同義で使われるようです。ここに出てきた『雑木林』や『農用林』は人間が少し手を加えた、いわゆる「二次林」(二次的自然)と呼ばれるものです。

1つ目の里山の機能としては、生物多様性を考える上で重要な存在であるということです。これは、山地から低地(集落・水田と河川)までが含まれていることから色々な群生の植物が育ち、いろいろな種類の動物・昆虫がそこをすみかとするのが具体的に挙げられます。

2つ目は、持続的な再生システム(循環システム)であるということです。これは雑木林の持続的な利用ということが具体例として挙げられます。11月から2月の間に樹木の伐採を行うと、翌年の春には伐採した切り株からは、「ひこばえ」という芽が出てき

ます。その芽は10～15年も経つとまた樹木に成長し、豊かな森林を形成します。また、伐採後の地面には日光が入りやすくなり、草本類の植物が育つことができます。こうした循環システムは「伐採」という人の手が加わることで廻りやすくなり、人と山の繋がりの象徴となりえました。

また、里山では自然の中で人が生きている場所であり、自然の恵みと自然と調和した文化を糧に生活している場所でもあります。

こうした自然と人とお互いに身近な存在である場所が里山なのです。